

＜投稿論文＞ジョン・ロールズにおける「重合的合意」概念の検討 政治におけるカント的道德の存在

著者	板橋 亮平
雑誌名	年報筑波社会学
号	16
ページ	89-104
発行年	2004-12
URL	http://hdl.handle.net/2241/108075

《投稿論文》

ジョン・ロールズにおける「重合的合意」概念の検討

——政治におけるカント的道德の存在——

板橋 亮平

I. 先行研究と問題の所在

1971年に出版されたロールズ (Rawls, J.) 著『正義論』は社会・人文科学の分野にあまねく影響を与え、議論を巻き起こした。ここではその詳細を取り扱うことはできないが、概ね『正義論』のもつ個人主義的・哲学的性格に対する批判という形で議論が展開された^①。伝統や歴史を重視する共同体主義から多くの批判にさらされたため、ロールズはかかる理論の個人主義的・哲学的特質を公共的・社会学的特質へと転換させる企図に腐心するようになる。そして哲学的自由主義から政治的自由主義への変更を企図し実が結ばれたのが、『正義論』が出版されてから14年後に書かれた「公正としての正義：形而上学的ではなく政治的」[1985]である。さらに彼の転向に磨きがかかり、「重合的合意の観念」[1987]、「正の優先と善の観念」[1988]、「政治の領域と重合的合意」[1989]といった諸論文が次々に発表される。そしてこれらの論文の集大成として結実した著作こそ1993年に出版された『政治的自由主義』に他ならない。さらに彼の晩年の最高傑作とも言うべき『公正としての正義—再説—』[2001]において政治的正義論が完成する。

こうしたロールズの政治的転換について『正義論』の時と同じく多くの批判がなされてきている。例えば、本稿の主題である「重合的合意論」についても多くの批判が存在する。例えば政治学者のサンドル (Sandel, M.) によれば、重合的合意論はリベラルな政治的価値(徳目)を奨励するという立論を行なっているかにみえるが、積極的に政治道德に関与することには帰結せず中立的政治論に終始している。よって真に政治道德的徳目を実現することに結実しないと切り捨てる^②。さらに法哲学者の井上達夫氏は、哲学的自由主義から政治的自由主義に移行したロールズの重合的合意論に対して評価を全く与えていない。井上氏は重合的合意のなかに偶然性(イデオロギー)を見ている^③。しかしかかる批判的諸見解に対して少ないが肯定的見解も存在する。政治学者のローティは哲学的人間存在論(カント的な道德論)を基礎にした正義論を放棄し、政治的正義論への転換を図ったロールズに対してエールを送るのである^④。

しかしここで筆者は、以上の先行研究が提示する主張とは別の見解をもつ。すなわち、政治的中立性を批判するサンドルや、イデオロギー性を難詰する井上氏の主張とは異なり、

ロールズの「重合的合意」はその定立にあたってカント的な道徳的原理（自由かつ平等の人格）⁶⁴を依然基礎としていると考える。さらにローティに至っては、ロールズ政治理論の歴史性にばかり気を取られて、カント的道徳の放棄を絶賛しているのだが、ロールズにおけるカント的な道徳的人格は払拭されてはいないと考える。本稿の主張（論証）はここにある。ハーバーマス（Habermas, J.）は、その著『事実性と妥当性』の第2章「社会学的法理論と哲学的正義論」で、次のようなことを述べている。「……正義の理論は、『重合的合意』を理性的なかたちで期待しうる、政治的—道徳的原理にかかわる問題の狭い範囲内だけを扱わなければならない」[ハーバーマス, 2002:83]。ハーバーマスによれば、まさに重合的合意論は、理性的（カント的）に基礎付けられなければならない、政治と道徳の結合ないし接続を正義論は扱わなければならない。かかるハーバーマスの見解は、ロールズ政治理論における（カント的な）道徳的基礎が底流に存在することを主張する本稿と、あいつうずるものがある。政治（社会）的秩序の構想を、カント的な道徳的人格の構想という規範によって基礎づけ定立しようというロールズによる強力的試みは、パーソンズ以来の規範的社会学（規範による社会秩序の形成原理の探求）が扱ってきた諸問題とも大きく関連していることを強調しておきたい。

そこで本稿では、ロールズ論文「重合的合意の観念」と「政治の領域と重合的合意」さらにロールズ著『政治的自由主義』と『公正としての正義——再説——』を検討することによって、「重合的合意」論のもつカント的な本質を明かにする。1987年に重合的合意論が本格的に（しかも初めて）取り上げられた論文「重合的合意の観念」から、晩年の2001年に再説された『公正としての正義——再説——』に至る過程で、ロールズは、カント的な道徳主義から距離をおきたがっているかに見えながら、実はカント的な道徳主義を活かすために政治的な重合的合意概念を巧みに利用したことが明晰にされる。いわば政治の仮面を被ったカンティアンとしてのロールズ像が、重合的合意論を説き続けた約15年間をつうじて一貫して変わらなかったことが浮き彫りにされる。

順序としては、正義の政治的構想についての重合的合意にまつわる、ロールズの多様な見解を比較分析する。そのさい、カント的な道徳原理が基礎になって重合的合意が実現されるとみなす「超越説」と、かかる原理とは無関係な諸教義の偶然的重合を強調する「内在説」とが取り上げられ、どちらの説をも支持するロールズの記述を確認する。しかしその上で、なおも重合的合意論全体におけるロールズの真意は、「超越説」に在ることを本稿は主張する。こうした主張の論証を行うために、次の2点を検討する。第一に、「カント的な道徳原理」とともにかかる原理と「社会的協働」概念との組み合わせによって、ロールズは「政治的」な重合的合意論を展開していること。第二に、「カント的原理」と（公共的な共有化された）「確信」との突き合わせとしての反省作業（反照的均衡）によって、ロールズは政治的な重合的合意論を確立していること。この2点を検証することによって、ロールズの政治的な重合的合意論の中に、カント的な道徳的原理がしっかりと根付いている

ことを強調する。政治社会の秩序を公共的な（重合的な）形で形成しうる道徳的規範に基づいて構築しようというロールズの試みは、（重合的概念の分析を通して）規範的道徳社会学として位置付けられうる社会学的インプリケーションを有していることを確認しておきたい。

Ⅱ．政治的構想と多元主義

『正義論』は立憲民主主義における、価値や教義の「多元主義」の恒久的事実を真剣に受けとめていないという反省からロールズの政治理論の形成は始まる。「それ（よく秩序化された社会について考える方途）は『正義論』における見解を修正する。『正義論』は、自身の原理が導く多元主義の状況を説明することに失敗している」[Rawls, 1989:491 または 2001:187]。「教義の多元性すなわち多元主義の事実というのは、すぐになくなってしまいうたんなる歴史的状況ではない。すなわち私の信ずるところによれば、近代民主主義の公共的文化の恒久的特徴なのである」[Rawls, 1987:425]。「対立しあい通約不能な諸教義の理性的な多元性は、持続する自由な制度のもとにおける実践理性の漸次的な特徴的所産なのである」[Rawls, 1993:135]。

ロールズによれば『正義論』はいささか歴史的ないし経験的ではなかった。価値や教義の多元性は「事実」であることを真剣に受けとめてはいなかったのである。ロールズが『正義論』で行っていた方法論（正義論の展開の仕方）について同意しない人々が多くいるかもしれない。もしかしたら自分の『正義論』は、多元主義を容認しない独善的なものに違いないとロールズは考えたのである⁶⁾。そこでだが価値や教義の多元主義を与件とした場合、正義の政治的構想（原理）⁷⁾にかんする重合的合意はいかにして成立するのか。そこで重合的合意が成立する3つの可能性を、ロールズは示唆する。「(a)政治的構想は、包括的教義から導出される。(b)政治的構想は包括的教義から導出されるのではなくかかる教義と両立可能である。(c)政治的構想はこの教義と両立不能である」[Rawls, 2001:193]。(a)のケースは、政治的構想が教義の内在的論理に依拠していることを示しており（内在説）、(b)のケースは、政治的構想と教義とが互いに独立的だが両立している状態を示しており（独立説）、(c)のケースは、政治的構想が教義の論理に抵触するがゆえに拒否される状態を指す（拒否説）。

筆者は、かかるロールズの分類はいまだ不十分であると考える。なぜならば、この分類が記述される以前の著作においてロールズは、以下の可能性を示唆しているからである。すなわち、政治的構想が教義に対して上位に立っている可能性である。このケースは、政治的構想が教義から導出されるのでもなければ、つねに構想と教義が互いに交わずに独立的かつ両立的であるケースに相当するのでもない。また教義が政治的構想を自律的に拒

否することもできない。そうではなく政治的構想が教義に対して独立的であり（その意味で独立説に似てはいるが）かつ優位な立場にあり、教義が構想を拒否できずに受容を迫られるようなケースである。このケースを「超越説」と呼ぶことにしよう。かかる超越説は、政治的構想がすでに確立されていることを前提としている。確立された政治的構想が教義に受け入れを迫り、場合によっては教義の論理の変更を迫るという意味で教義を超えているのである。そこでだが、ロールズ自身は(a)の「内在説」とかかる「超越説」の両説を支持するような記述を残している。そこで次にまず、「超越説」を裏書きする証拠記述をみていくことにしたい。

Ⅲ. 「超越説」

政治的構想にかんする重合的合意の確立にあたり「……我々は、なんらかの宗教的、哲学的、道徳的見解、あるいはこれらの見解と結びついた真理の哲学的説明や価値の身分などを、できうる限り主張もしないし否定もしない」[Rawls, 1987:434]。であるから、「道徳的」・「哲学的」なるものから超越した「政治的」なるものが固有な存在として浮かび上がる。「政治的なるものを特別の領域とみなすことにより、その基本的価値を定立する政治的構想が『独立的』な freestanding 見解であると述べることにしよう。……我々の狙いは、主要な制度が重合的合意の支えを得ることができる形で政治的なるものの特別の領域を特定化することである」(Rawls, 1989:482-483]。かかる独立性はあらゆる教義や価値から超越しているという意味で「理性的」でなければならない。「政治的構想とはそれ自身を、(社会の) 基本構造のためだけの理性的な構想として提示する」[Rawls, 1993:175]。「正義の構想が政治的であると言うときに私が意味していることは、……この構想がなんらかのより広範な包括的な宗教的・哲学的教義から独立して提示されるということである」[Rawls, 1993:223]。政治的構想は、独立的でありつつ、かつ自身がかかる構想を提示するという意味で超越的規範となるのである。かような独立的かつ超越的な構想が諸教義に対して優位に立ち、教義の側からの自律的な受容や変容をもたらした時、これら教義はまさに理性的なものとなる。「いつ、包括的教義が理性的であると判断されるのか。……理性的な教義は判断の重荷、したがって政治的価値の中でも良心の自由のような価値を認識しなければならない」[Rawls, 2001:191]。

以上のように、かの「超越説」を支持する記述をロールズは残している。上の記述のように、あらゆる哲学的、道徳的教義から超越したものとして正義の政治的構想は規定される。20年間にわたる「政治的」なるもののもつ超越的独立的性能への、ロールズの格別な拘りがうかがわれるのである。重合的合意とは正しく理解すれば、諸教義の重なり合うところに成立する「共通な」合意の謂いであり、合意の対象である政治的構想はまさに諸教

義の重合の結果として定立される。しかしかかる重合を諸教義の持つ内在的論理の束（妥協）の結果として解釈する（内在説）ならば、ここにおいて創出される政治的構想の性能は超越的ではない。なぜなら超越的であるということは諸教義の論理を超えており、さらに政治的構想の正当化が諸教義の論理に含まれる論拠を一切拒否するということだからである。超越的な正義の政治的構想が諸教義に対してその受容や変容を迫り、自ら理性的になっていくことにより、諸教義の間に存在する分断構造が次第に「政治的な」領域へと牽引され、重合が生まれる。超越的な政治的構想と日常的な熟慮された判断との往復運動による（ロールズが主張する）反照的均衡は、内在説を支持するものではない。政治的構想が熟慮された判断と一致するのは、まさに我々の「熟慮」がカント的な道德原理との照合によって政治的構想を発見し、かかる照合作業（公的理性の使用）により判断が重合するからである。

V節でみるように政治的構想の重合は、あくまで諸教義に対して優位な、カント的な道德原理の働きにより創出されたものであって、諸教義の内在的働きによって構想されたものではない。カント的な道德原理を道理的かつ合理的に拒否できる可能性は、我々には残されていないのである。「……人格の構想は、市民が民主主義的な社会の公共的・政治的文化のなかで、つまりその基本的な政治的文脈（憲法と人権宣言）のなかで評価される方法から、次第に作り上げられるのである」[Rawls, 2001:19]。そしてロールズにとって、近現代のかかるカント的人格の道德原理は所与（超越的）なのである。「私がいうところの政治的自由主義を述べるにあたり、民主主義的な社会の公共的・政治的文化に必然的に含まれる多くの馴染み深いかつ基本的な観念をもって出発してきたのである」[Rawls, 1993:43]。しかし彼は「超越説」と相反する「内在説」を支持する記述も行なっている。その真意はともかく、次にこのことをみていこう。

IV. 内在説

本稿では「超越説」と「内在説」との相違が重要だが、まずは「独立説」と「拒否説」について簡単に分析しておく。「独立説」も「拒否説」も、構想と教義の「対等性」を述べている。「独立説」は、構想と教義がともに安定的な両立関係を築いているのだが、「超越説」のように構想が教義に対して上位に立つのではない。また「拒否説」は「独立説」の裏返しであり、構想と教義が対等関係であるがゆえに、「超越説」とは異なり、教義が構想を無条件に受容したり、教義を変容させたりすることはないのである。対等な立場において構想と教義とが安定的関係を築いても、「超越説」の説くがごとき超越的な基礎を持たないがために、「独立説」は容易に「拒否説」へと転化する可能性を秘めている。それは、構想が超越的に自己の論理をいやがおうにも押しつけるだけの強い立場にはない（対等な立

場)と想定されているからであり、このことは構想が教義に拒否される可能性を残す。「独立説」において構想が教義に「受容」されるのは、対等な立場にある教義がその内在的論理(論拠)によって構想を「支持」するからであり、「拒否説」において構想が教義に「拒否」されるのは、対等な立場にある教義がその内在的論理(論拠)によって構想を「峻拒」するからである。

さて、「内在説」は諸教義の論理に含まれる内在的論拠によって正義の政治的構想が成立することを説く。構想は諸教義を重ね合わせていった時に、偶然にもしくは幸いに創出されるのだ [Rawls, 1993:148]。かかる構想についての重合的合意は、確かに諸教義の共通な焦点として規定されるのだが、「超越説」のように優越的な形で特定化されるのではない。むしろこの共通な重合は、幸福なる偶然なのかもしれない。かように「内在説」は偶然的であることを告白しているため、「独立説」や「拒否説」に似ている。しかし「内在説」が「独立説」や「拒否説」と異なるのは、構想と教義との対等関係を前提としていないことである。むしろ諸教義が構想に対して上位にあり、構想を創出する役目を負っているということである。ちょうど「超越説」が述べる、構想の諸教義に対する超越性とは逆なのである。そこで、ここでは「内在説」のみに焦点をあてていこう。まずはロールズの証拠記述をみていくこととしよう。

「……一般的かつ包括的な教義から明白に出発することによって、我々は政治的見解を提示することができる、または、公共的政治文化に潜在するとみなされる基本的な直観的観念から出発することができる」 [Rawls, 1987:429]。すなわち「……何であろうとも彼ら(市民)自身の包括的見解の立場からみて、すべての者が真あるいは理性的であるものとして政治的構想を受容することを可能にすることを、我々は希望する」 [Rawls, 1987:435]。そして「政治的領域の偉大な価値が自身の包括的教義の枠内における他の価値といかに関連しているかを考えるかは、……個々の市民に任されているのである」 [Rawls, 1989:485]。したがって「政治的構想を確証する人々はみな、自身の包括的教義の枠内から出発し、かかる教義が提供する宗教的、哲学的、道徳的根拠に依拠する。……かような根拠に基づいて同一の政治的構想を確証しているという事実は、彼らの確証が宗教的、哲学的、ないし道徳的なものであるということの意味するのである」 [Rawls, 1993:147-148]。結局のところ「そのような合意(重合的合意)においてこうした(正義の)政治的構想は、異なるそして対立する包括的教義を奉戴する市民によって確証され、そして彼ら自身の異なった見解の枠内で確証するのである」 [Rawls, 2001:199]。

以上、「包括的な教義から明白に出発」、「包括的見解の立場からみて」、「包括的教義の枠内から出発」、「異なった見解の枠内」といった表現はすべて、諸教義の内在的論理から政治的構想が創出されることを意味しており、それゆえ「内在説」を支持するものである。まさに重合的合意は、諸教義がもつ個別独自の論拠に基づいて正義の政治的構想を提示・確証するところに成立するといわんばかりである。したがって「超越説」のように、構想

による強要やそれによる教義の受容も変容もない。あくまで構想が教義の下に位置する。もちろん政治的構想の教義に対する下位性を主張したからといって、かかる構想が教義と背反するということではない。つまり構想と教義の両立可能性は依然存在する。しかしながら「内在説」では構想と教義は対等でない。以上の理解を前提とすると、ロールズの重合的合意論は相矛盾する「内在説」と「超越説」とを内に含んでいると解釈できるが、ロールズの政治的自由主義は全体として「超越説」を採っている。もしロールズの「内在説」を真に容認してしまえば、先の井上氏による「イデオロギー」批判を免れないが、管見の限り「内在説」は、ロールズの真意ではない。

V. 道徳に基礎付けられる重合

ロールズの真の意図はカント的道德に裏付けられた政治的構想の創出なのである。ロールズは、重合的合意論において「内在説」に一定の立論的根拠を残しながらも、最終的には「超越説」へと政治的原理の基底の根拠を求めるのである。ロールズの重合的合意論は妥協点を探るたんなる「暫定的」構想ではない。底流に潜むカント的な「自由かつ平等な道徳的人格」の原理を基礎とした「道徳＝政治的」構想^⑧なのだ。

「……第一に合意の対象である正義の政治的構想は、それ自体道徳的構想である。そして第二に、かかる構想は道徳的根拠によって確証される、すなわちこの構想は正義の原理同様、社会の構想そして人格としての市民の構想を含み、そしてこれらの原理が人間性に具体化され公共生活に表現されるような協働的な徳^⑨にかんする説明を含む」[Rawls, 1987:432 または 1993:147 または 2001:194-195]。よって「それ（正義の政治的構想の内容）は、基本的な政治制度に適切に適用する一群の高度に重要な（道徳的）価値を定式化したものである」[Rawls, 1989:482]。つまり政治的なもの（構想）は、道徳的な価値や根拠を基盤にしなければ定立しないのである。よって「……正義の政治的構想を確証するさい我々は、結局自身の包括的な宗教的・哲学的教義の少なくとも一定の側面を主張しなければならないかもしれない」[Rawls, 1993:152]。もちろんかかる「一定の」側面とは、諸教義に含まれる内在的論理を指示するものではなく、「普遍的な」カント的道德原理を指示すると解釈されよう。以上のようにロールズにとって「道徳的」なるものへの拘りがみてとれる。

「政治的」なるものが特別であり、道徳的なものに依拠しないものであると言っていたはずのロールズだが、しかし重合的合意がたんなる時空に規定された歴史的な偶然事ではないとすれば、やはり上でロールズが言うように「道徳的なもの」はまさに基礎的条件なのである。ロールズは、重合的合意が偶発的な一致や諸利益の偶然な一致としての「暫定協約」modus vivendiではないと執拗に述べている [Rawls, 1987:432-433 または

1993:147-148 または 2001:192-195]。重合的合意がたんなる偶然のものではないとすれば、かかる重合はなんらかの独立した基礎によって実現されなければならないということである。重合するのは諸教義であるが、偶発的な重合でないためにはそれらの教義を超えている別物としての基礎が存在しなければならない。それこそがまさにロールズの言うかの「道徳的構想」である。この上位の「道徳的」なるもの（カント的原理）は重合する下位の「道徳的」（哲学的・宗教的）な諸教義とは異なる（超えている）。超えていなければロールズの「政治的」なるものは、たんに諸教義の論理によって定立されることになり安定化しない⁽⁴⁰⁾。つまりかの「内在説」に戻ってしまい元の黙阿弥なのである。もちろん重合的合意が超越的な道徳的根拠によって基礎付けられているということの意味は、政治的構想が先験的にかつ必然的に確立定位されるということではない。むしろ普遍的なカント的道德原理への志向性を有する熟慮された判断ないし確信に基礎付けられたコミュニケーションが、結果として政治的構想を創出し、重合的合意の持つ道徳的超越性の存在を確証することが可能なのである⁽⁴¹⁾。ロールズが「政治的」なるものの基礎として念頭においている「道徳的」なるものは、上位独立している。この超越した「道徳的」なるものが、分断され多元的な（下位の）諸教義を牽引し重合させるのである。諸教義がどうであれ不動の「道徳的」なるものは微動だにしないであるから、かかる重合的合意は「暫定協約」ではないのである。

重合的合意が、なぜ重合しているのかと言えば、まさにそれは上位の「道徳」が諸教義を教導しているからに他ならない。諸教義の重合は、その重合の外にある一致（合意）していない諸教義の多元性をも保持している。このことはロールズにおける上位概念としての「道徳」が、一元的で独善的でないということを意味している。それは、ロールズがカント的な「自由かつ平等な人格」の道德律を一元的に設定するのではなく、一定の範囲における諸教義の重合と、教義の重合外部分の多元主義とを「事実」として真剣に受けとめようと考えたからに他ならない。カント的な道德律が「政治的」なるものを生み出す装置として一元的に適用されるならば、諸教義の多元性を保持することはできない。ロールズにとって多元性は、民主主義体制の立憲国家の「事実」であるから、諸教義を変質させ一元的に収斂させることは、「重合」や「多元性」ではなく「一致」や「一元性」を意味し、「事実」に反するのである。では、多元主義を所与として、カント的な道徳的理念を政治的な重合的合意論で活かすために、ロールズは具体的にどのような方途を採るのか。このことを次に検討してみよう。

VI. 社会的協働と組み合わされた道徳的理念

カント的な道德律を一元的（独善的）に適用せず重合的な合意程度にとどめておくには

いったいどうすればいいのか。結論から言えば、安定的に「合理性」（私的自律）を追求することが可能な、「社会的（政治的）協働」（公的自律）と「カント的な道德律」（道理性）とが実現される公正かつ道徳的な秩序ある公共社会において、私的自律が道德律に裏付けられ、政治＝道徳的に重合が構想される。ロールズは、多元主義の事実を真に受けとめるためにカントから距離を置きたがっているが、それは不可能だ。どうやら先に引用したかの「人格」と「社会」の構想に鍵があるようだ。ロールズの「人格」概念は、カント的な「人格」概念にロールズの「社会」概念を組み込んでセットで成立する。政治的な社会的協働の構想（公的自律）と、狭い意味でのカント的な道德的人格構想（私的自律）とは相補的であり、相互に他を必要とするかぎり依存的である [Rawls, 1996:107]。「公正としての正義において、かかる欠けた構想（正と善の構想）は、社会と人格という政治的構想と結合した実践理性の原理を使って構築されるのである。このことは、社会の成員が2つの道徳的能力⁽¹²⁾を必要な程度に持つ、自由かつ平等とみなされる市民だ、という特別な場合である。……ここで言う道徳的主体とは、一般的な意味での道徳的主体ではなく社会の成員としての自由かつ平等な市民なのである」 [Rawls, 1996:109]。

ここで、一般的な意味での道徳的主体とは、カント的な自律的主体のことだが、ロールズにおいては道徳的だけではだめなのである。なぜならば、民主主義体制に生きる「市民」は「理性的」であるばかりでなく、「合理的」な存在でもあるからである。カントのように叡智界に生きる理性的存在者（道徳的主体）のみを前提することは、「政治的」構想の範疇外である。理性的存在と合理的な存在、超越的前提（人格の自由かつ平等）と経験的前提（人格における合理的な生の計画、つまり善）とがあい結ばれてこそ、この人格的存在はまさに「政治的」（社会的）となる。「……自由かつ平等な市民は、理性的でありかつ合理的でもある市民を表象する条件のもとで、彼ら自身が政治の原理についての合意を達成する者としてみなされる」 [Rawls, 1996:381]。

包括的教義（善）の多元性の事実を所与として、自由な公共的理性による宥和の目的は2つある。「第一に、自由かつ平等とみなされる市民のあいだにおける、相互の尊重と一致した公正な社会的協働の条件を表現するさいの、政治的価値の基本的役割を同定することである。第二に、重合的合意に表される政治的ないしその他の価値のあいだの、十分に包括的な適合的一致を発見することである」 [Rawls, 1987:440]。重合的合意が達成されるのは、自由かつ平等な市民というカント的な道徳的理念のみならず社会的協働という政治的経験事実を考慮に入れる場合に限るのだ。社会的協働の「存在」は恒久的な事実である。すなわち「ある世代から次の世代へとつながる社会的協働」 [Rawls, 1993:93] である。さらに社会的協働の「条件」は「包括的教義の多元性を所与とし、すべての市民が理性的に支持すると期待されうる……基本的な政治的・立憲的価値を参照して、最もよく述べられるのである」 [Rawls, 1989:490]。

さらにロールズにおいては、「理性性」は「合理性」に優先しなければならない、権利（自

由)の価値(善)に対する優位を示す⁽⁴³⁾。かかる崇高な人格の規定は、カント的な道徳的理念を指示する。「……理性性は、合理性に対して優先性をもち、絶対的にそれを従属させる。つまり公正としての正義は、かかる性能をもつという点でカントの見解と似ているのである」[Rawls, 2001:82]。ここで「似ている」と述べるのは、カントにおいては超越的理念としての理性性のみを想定しているからであり、ロールズが設定する理性性(上位の道徳)と社会的協働との「セット」とは異なることを言おうとしたためである。セットだが、カント的な道徳的理念は生きている。

真相は、ロールズはカントを捨てたのではなく、むしろカント的な道徳(理性性)を政治的に活かすために「社会的協働」(善を実現する公正なシステム)をとりこんだのである。諸教義(善)の「重合」が実現可能なのは、理性性(カント)が合理性(教義・善)に対して優位に立ち、後者を前者が牽引していくからに他ならない。カント的な道徳の理性性は、政治の領域(重合)を創出し、暫定協約ならぬ合意を確保する基礎なのである。カント的な道徳が、政治的なものの底流において重厚にその存在を主張していることは、以上により明確になったと思われる。最後に、ロールズの政治的自由主義において、カントがますます生きてくる論証として「反照的均衡」について検討する。ここでは重合的合意概念との関係が明晰にされる。

Ⅶ. 反照的均衡と重合的合意

「反照的均衡」という方法の検討は、ロールズの「政治的」なるものの中にある「道徳的」なるもの(カント)の存在を見極める上で重要である。まずは定義からみておく。「我々は、宗教的寛容についての信念や奴隷制の拒否といった定着した settled 確信を収集し、こうした確信に含まれる基本的観念や原理を、正義の一貫した政治的構想にまとめあげようとするのだ。かかる確信は、理性的な構想が説明せねばならないように思える暫定的な不動点なのだ。……我々は、我々のもっとも固くいだかれた確信に適する正義の政治的構想の中に組みこまれるのに充分明確な形で、こうした観念や原理を定式化することを希望する。我々は以上のことを、次のようなことを主張することによって表現する。すなわち正義の政治的構想が受容されるには、適切な反省つまりいわゆる『反照的均衡』において、あらゆる一般性の水準に見合った熟慮を経た我々の確信と一致しなければならないということである」[Rawls, 1996:8]。

なぜ、かの定着した確信を参照しなければならないか。その理由は、この確信がすぐれて公共的だからだ。「……我々が公共的な政治文化をつうじて共有していると思われる、基本的な直観的観念に目を向けるのである」[Rawls, 1987:435]。かかる確信(直観的観念)から政治的構想を抽出するのが「反照的均衡」である。ロールズにおいては、立憲民主主

義に生きる我々市民にとって、宗教的寛容や奴隷性の廃止など共有化されている政治的価値判断（確信）は、さしあたり不動のものとみなすという判断がある⁽¹⁴⁾。ロールズにとって正義を構想しようというときには、公共的に幅広く受け入れられている（それゆえあまり変動しない）経験的判断（確信）に仰ぐのである。そして、その判断の中に含まれる基本的観念や原理を探し出し、それによって正義の構想を目論むことができる。民主社会に胚胎している確信を集め（寛容や奴隷性廃止）、カント的な自由かつ平等な人格の道徳的原理を正当化しようと試みる⁽¹⁵⁾。正当化を超越論的にやろうとすれば、「政治的」を標榜するロールズにとっては真意に反するから、できるだけ公共的確信（判断）を集めてかかるカント的な道徳理念（自由かつ平等な人格）を正当化しようとする。もちろん、この証拠たる確信がカント的な道徳原理と一致しないものばかりであれば、ロールズの反照的均衡は成立しない。宗教的寛容は道徳的廃頹をもたらすからよろしくないとか、奴隷制は階層社会を良き秩序に保つのに不可欠とみなす人々の確信が強い社会では、そもそもこの確信はカント的な道徳的原理と齟齬をきたし均衡しない（それゆえ正義の政治的構想を創出できない）。

ロールズが行おうとしていることは、カント的な道徳的原理の「証明」（実証）である。その証明には、データたる確信が必要なのだ。もしかかるデータを収集しても、カント的な道徳的原理に抵触し正義の政治的構想に辿り着けない（均衡しない）とすれば、データの集め方に問題があったか、さもなければ、自由かつ平等の民主主義政治社会がいまだ現実化していないことの証左である。もしカント的な道徳的原理に一致すればかかる確信は、まさに「確信」から「政治的」構想へと格上げされる⁽¹⁶⁾。格上げされるのは、そもそもこの確信が公共的性能をもっているという理由の他に、カント的な道徳原理にパスするからである。いくら公共的にいだかれた確信であっても、自由かつ平等な人格（市民）の道徳原理に抵触する確信であれば「政治的」構想にはなりえない。だからこそ「適切な反省」が必要なのだ。正義の政治的構想は、確信の寄木細工ではない。これはちょうど諸教義の重合的合意が、たんなる諸教義の内在的論理の寄せ集めとしての「暫定協約」ではないことと対応している。諸教義や確信が、まさに理性的かつ政治的に（重合的なかたちで部分的に）転化するのは、常に適切な反省の道具としてのカント的な（上位の）道徳的原理に依拠することによってである。

しかし確信や教義は、そのすべてがカント的な道徳的原理と一致し合致するのではない。依然ロールズにおいては、確信や教義の多元主義は民主主義社会の恒久的事実としてうけとらねばならない以上、かかる完全なる一致や合致はありえない。むしろ、カント的な道徳的原理（理性性）が部分的な重合を強要しつつ、しかしその重合外における諸教義の多元化を保持するのである。したがってロールズの政治的自由主義は、「反照的均衡」論においてもカント的な道徳的原理をその内にしっかりと内蔵させながら、その「政治的」なるものの領域を暫定的ならぬ安定的に構成するのである。「政治的」の中にカントは生きてい

るし活かされている。

VIII. おわりに

これまで本稿が明かにしえた点は、ロールズの政治的自由主義においては、「政治的」なるものが「道徳的」なるものを内蔵させつつ、それにしっかりつなぎとめられることにより、(暫定的ならぬ) 安定的な重合的合意(政治)と恒久的な多元化した教義(善)との「よく秩序化された社会」が構想されていることである。カント的な道徳の原理は、重合的合意(正義の政治的構想)を作り出す基礎であり装置であった。正義の政治的構想を支える支持基盤は、あくまで諸教義を重合させ統率する上位のカント的な道徳原理である。カント的原理と諸教義とが常に相互に突き合わせられ反照される中において、重合的合意(政治)が生まれる。ロールズの「政治的自由主義」に対する最近の(過度なまでになされる)解釈としてのカント的道徳原理の放棄は、正鵠を得ていない。政治的な重合的合意論におけるカントの本質は、15年間に於いて底流に一貫して存在し続けたのである⁽⁴⁷⁾。

〈注〉

- (1) この点については例えば、『ロールズ』[川本, 1997: 210-224]を参照。
- (2) 『自由主義と正義の限界』[サンデル, 1999: 354-355]を参照。
- (3) 「……政治的リベラリズムはその『正義の政治的構想』の基礎を真理要求をもつ一つの哲学的理論のうちではなく、……合衆国の政治文化の中に明示的・黙示的に包含されているとされる基本的な諸直観に求め、かかる文化の中で生き延び得る範囲内での対立競合する一般的・包括的な宗教的・倫理的・哲学的諸理説……が、それぞれ理由を異にしながらも等しくこの構想を受容するという『重合的合意 (an overlapping consensus)』の成立を以てこの構想の成功とする。ロールズによる彼のプロジェクトのこのような再定式化は、……私見によれば、後退である。……政治哲学は自らが置かれている時代と社会の問題に答えなければならないが、このことは特定の時代の特定の社会の支配的コンセンサスのうちに自己満足に自閉することとは別である。……現在の合衆国の政治文化のどこまで共有化されているか分からない基本的直観なるものの合理的再構成だけを拠所にして、そのプロジェクトを遂行できると考えるのは不可能である」[井上, 1999: 118-121]。
- (4) 「……ロールズは、正義の原理の再定式化に関しても、人為的に設定された形式的空間における演繹的推論によってではなく、様々な私的アイデンティティを具えた個人の『重なり合うコンセンサス』によって保証しようとするのである。……ポストモダン・ブルジョワ・リベラリズムにとっては、リベラリズムの相対性(換言すれば偶然性)を自覚すること、……が重要な構成条件だからである。……いまやローティにとって、ロールズはポストモダン・ブルジョワ・リベラリ

- ズムの同志なのだ」[渡辺, 1999:17-19]。なおローティ自身、次のように述べている。「私を含め多くの人々は、ロールズ『正義論』を当初このような試みと考えた。それは、我々の道徳的直観を、人間本性の構想に基礎付けようとする啓蒙主義的試みを継続すること…と考えられた。しかし、『正義論』に続くロールズの著作は、我々がそれを誤って読んでいたこと、そしてカント的な要素を強調しすぎ、他方、ヘーゲルの・デューイ的な要素を過小に考えていたことを認識させたのだ」[Rorty, 1994:185]。
- (5) ロールズは、本稿で検討する一連の政治的著作において、「自由かつ平等な人格（市民）」という表現を繰り返し使用しているが、決してそれがカント的な人格だとは言わない。それはカント的＝道徳的というイメージを払拭したいのだろう。しかし多くのロールズ研究者は、この人格をカント的だとみなしている。「カント的な自由かつ平等な諸人格」＝「道徳的人格」と強く規定する川本氏（川本, 1997:199）や、人格のカント的構想とは「自由、平等、理性的かつ合理的な」人格の構想のことであるとするフリーマン [Freeman, 2003:31] らの規定を参照されたい。
- (6) 例えば、『政治的自由主義』[1993] に1996年に加えられた「ペーパーバック版」への紹介でロールズは、『正義論』における公正としての正義論はひとつの教説であり、理性的な多元主義を所与として、こうした正義論を社会の基本構造に適用する政治的構想へと変形することが、政治的自由主義の眼目であると述べている [Rawls, 1996:xliii]。
- (7) 正義の政治的構想（原理）は、『正義論』の時とはほぼ変わらず、2つの原理からなる。第一原理である「万人の平等な自由の原理」。そして第二原理である、(a)「格差原理」と(b)「機会均等の原理」である。社会的不平等は、もっとも恵まれない人々を改善する条件のもとでのみ許されると規定するのが格差原理である。かかる不平等は機会の公正な平等のもとで、万人に開かれた地位・職務に付随しているかぎり許されるとするのが機会均等の原理である [Rawls, 1996:5-6]。しかし、こうした諸原理がどのような手続きで導出されるかについては、政治的転換以降、ロールズは語っていない [渡辺, 2000:118]。
- (8) ロールズ研究者でも、このように政治と道徳が密接不可分であることを、重合的合意論において主張する者がいる。「政治哲学の任務は、……重合的合意の中心にありうる政治道徳 political morality の核心を展開させることである」[Pogge, 1989:213]。ただし、詳細な分析はなされていない。
- (9) ただし「協働的な徳」は、2001年では「政治的な徳」と言い換えられている。
- (10) 「彼の正義の政治的構想が合意の対象として役立つのならば、それは道徳的構想である。暫定協約とは違いその安定性は、異なる包括的教義を支持する人々のあいだでの、力の特定の分配に依拠しないであろう」[Mulhall=Swift, 1992:187]。
- (11) むろん、道徳性は微動だにしないということが、かの討議や対話を否定することを帰結するわけではないことは当然である。なぜならば、原理（カントを含む）と熟慮（対話）との一致を説く「反照的均衡」論は、ロールズ政治理論の真髄であるからである。
- (12) 「正義感覚の能力」と「善の構想を追求する能力」である [Rawls, 1993:19]。川本氏はこれをわ

- かりやすく言い換え、前者を「正義感覚の発揮」、後者を「善＝幸福感の形成」と規定している [川本, 1997:216]。
- (13) 理性的に好ましい条件のもとで、基本的自由の善に対する優位がすべての市民に承認される。理性的な条件は基本的自由を確保し、合理的なかたちで自律的に振舞う市民はこの条件によって合理的な善を追求できる [Rawls, 1993:324-325]。また理性性は合理性に優先しなければならないと述べながら、他方で両者の性能は相補的であると主張するのは一見矛盾したように思えるが、かかる優先性は、理性性の合理性に対する一方向的制約を意味するのではなく、両者にコンフリットが生じた場合にのみ、かかる優先が想定されなければならないということである [Rawls, 1996:174-176]。したがって対立が生じない場合には、両立可能性かつ相補性が想定されても問題はないと思われる。
- (14) 良心の自由や奴隷・隷属からの解放は、平等な基本的自由 equal basic liberties を保証し、固定化され fixed 定着化した settled ものである [Rawls, 1987:435]。
- (15) 渡辺氏によれば反照的均衡においてロールズのリベラリズムは、「基礎的判断」とよばれるものを修正ないし破棄可能とはみていない。その判断とは、①人々は、自由かつ平等な人格である。②人々は、2つの道徳的能力を有する。③誰一人、おのれの責任に帰することができない理由に基づいて賞罰を受けてはならない。本稿では①のカント的な道徳的原理を重視する。そしてこれらの判断が基礎となって政治的構想（原理）が導かれると言う意味で「基礎付け主義」としている。もっとも渡辺氏は、政治的転換後のロールズはかかる基礎的判断を重視していない、として基礎付け主義を撤回したとも言っている [渡辺, 2001:81-84]。しかしこの主張は明かに本稿とは異なる。
- (16) 「……正義の政治的構想は、包括的教義を前提とした正義の構想とは……異なる。……ロールズによれば……公正な手続きを規制する中立的価値に訴えることにより、教義が正当化されうるならば、この教義は手続き的に中立的なのである」 [Young, 2002:58]。この価値がロールズの言う、近代民主国家の「平等な政治的価値の公正な価値」 [Rawls, 2001:148] を指示することは言うまでもない。かような基礎的なカント的平等の価値に「訴える」ことによって、諸教義は重合し（それゆえ重合している部分において教義は中立的＝超越的）政治的構想が創出される。
- (17) 「重合的合意論」の検討を行なう本稿とは方法を異にするが、カント的な道徳原理が政治的自由主義を基礎付けているとする点で、本稿と同じ結論を主張するアレハンドロがいる。「彼の政治的構想が……カントやミルの自由主義の基礎をなす同じ基準を含んでいる、ということを私は示す」 [Alejandro, 1998:130]。例えばカントは次のように言う。「道徳的法則は、理性の判断において、何よりもまず意志を客観的にまた直接に規定する。自由の原因性は、道徳的法則によってのみ規定せられ得るが、この自由の本質は、一切の傾向性を、従ってまた人格そのものの評価すらも、（実践）理性の純粋な法則を遵奉するという条件に制限するにある。……道徳的法則を承認するとは、実践理性の活動を客観的にもとづいて意識することである……」 [カント, 1979:164-165]。自由な意志能力を道徳的法則は理性的に基礎づけているという客観的（公共的）認識が必要であ

る、というカントの理論がロールズの政治的自由主義に内包していることは、おそらく妥当性を持っているであろう。

〈文献〉

- Alejandro, R. 1998, *The Limits of Rawlsian Justice*, Johns Hopkins University Press.
- Freeman, S. 2003, "Introduction: John Rawls", Freeman Samuel eds., *The Cambridge Companion to Rawls*, Cambridge University Press.
- ハーバーマス, ユルゲン 2002, 『事実性と妥当性 (上)』 (河上倫逸他訳) 未来社.
- 井上達夫 1999, 『他者への自由』 創文社.
- 川本隆史 1997, 『ロールズ』 講談社.
- カント, イマヌエル 1979, 『実践理性批判』 (波多野精一他訳) 岩波書店.
- Mulhall, S. and Swift, A. 1992, *Liberals and Communitarians*, Blackwell.
- Pogge, T. 1989, *Realizing Rawls*, Cornell University Press.
- サンデル, マイケル 1999, 『自由主義と正義の限界』 第2版 (菊池理夫訳) 三嶺書房.
- Rawls, J. 1987, "The Idea of an Overlapping Consensus," Freeman Samuel eds., *Collected Papers*, Harvard University Press.
- 1989, "The Domain of the Political and Overlapping Consensus," Freeman Samuel eds., *Collected Papers*, Harvard University Press.
- 1993, *Political Liberalism*, Columbia University Press.
- 1996, "Introduction to the Paperback Edition," *Political Liberalism*, Columbia University Press.
- 2001, *Justice as Fairness: A Restatement*, Erin Kelly eds., Harvard University Press.
- Rorty, R. 1994, *Objectivity, Relativism, and Truth*, Cambridge University Press.
- 渡辺幹雄 1999, 『リチャード・ローティ ポストモダンの魔術師』 春秋社.
- 2000, 『ロールズ正義論の行方』 増補新装版 春秋社.
- 2001, 『ロールズ正義論再説』 春秋社.
- Young, S. 2002, *Beyond Rawls*, University Press of America.

(いたばし りょうへい／中央大学経済研究所)

An Analysis of the ‘Overlapping Consensus’ in John Rawls: Morality in Political Theory

Ryohei ITABASHI

The Institute of Economic Research, Chuo University

The purpose of this paper is to analyze the conception ‘overlapping consensus’ in Rawls’s political theory. I make it clear that there’s been a Kantian moral principle of free and equal citizens. I rebut the general views that Kantian perspective be thrown away in Rawls’s liberalism.

Firstly, I study how overlapping consensus forms. There are two views in this formation. One is ‘transcendent view’ and the other ‘immanent view’. The former is overlapping consensus forms independently of comprehensive doctrines. The latter is overlapping consensus is created from doctrines. Although Rawls espouses both of them, I suggest Rawls adopt ‘transcendent view’.

Secondly, I indicate a stable overlapping consensus is created when moral principle is combined with the political conception of social cooperation between free and equal citizens.

Finally, I analyze ‘reflective equilibrium’ in Rawls. I demonstrate political conception forms by collating moral principle with public convictions.